

元での実体の本性であっても変わりはなく、すべての存在するものは必然的に存在するのである。唯一自由な原因といわれるべきなのは、自己の必然性のみによって存在する場合なのである。実体が自由なのは、一切のものが実体の本性から必然的に生じるからであり、偶然的に創造されるからではないのである。自由は「内的な」必然性であり、「自己の」必然性なのである。そして、実体とは、存在そのものであるから、その存在そのものを、受容するのではなく、我々は実体の一部であるということを反省的認識によって受容する事によって自由になれるのである。

ウエスレーのサタン理解

野村 誠

ジョン・ウエスレー(一七〇三—一七九一)が活躍した十八世紀は産業革命の時代で、その時代の人々は近代的、啓蒙的な側面があった。しかし、一方で、貧困なスラムに住む一般大衆は疫病に悩まされ依然として「呪術的な世界」の中で生きており、悪魔(Satan)の働きを信じていた。かくして、ウエスレーの説教の中の悪魔、悪霊といった概念が、民衆の心にわかりやすいメッセージとして届いたのではないかと考える。そこで、ウエスレーのサタン(Satan)理解を考察したいと思う。

山中弘は『イギリス・メソディズム研究』(ヨルダン社、一九九〇年)の中で、ウエスレーの説教について、「魔女、悪魔、

霊といったアルカイックな宗教的表象の實在を語り、信仰治療に肯定的に接するその宗教性は、公的宗教の圏外にいた人々のいまだく民間信仰的な宗教性と親和性を帯びていたといっている(四六頁)と述べている。ウエスレーの説教と聖餐式、祈禱などは、「サタンとの対決」、あるいは「サタンの支配からの解放」を可能にする「恵みの手段」と理解できる。悪魔すなわち悪霊は、人の心の中で働き、人を地獄へ導いていく人格的存在である。説教「悪魔の策略」(Satan's Devices)『ウエスレー著作集5 説教下』(野呂芳男訳 新教出版社、一九七二年)でウエスレーは、悪魔を「陰險な神」と表現し、人格化というよりもむしろ神格化している。ウエスレーによれば「われわれ自身の劣悪さ・罪深さ・価値のなさを考えさせることによって、悪魔はわれわれの主における喜びを消そうと努める」(同、六頁)。賢く巧妙な悪魔は、われわれの弱さにつけ込み、人間の罪深さを思い起こさせ、神に近づくに値しない存在と自覚させることによって、神との関係を断絶させようとする策略家である。

説教「原罪」の中で、ウエスレーは語る。「悪魔はわれわれの心の上に、我意という悪魔自身の画像の刻印を押した。悪魔は天から追い出される前に言った。『私は北の方いたる処に住みつこう』」(同、三七頁)と。こう述べたことから、ウエスレーは「悪魔は天にいた」と考えていたことがわかる。十三世紀から十八世紀にかけて魔女狩りが行われていたこと(ブリタニカ)からも理解できるように、一般民衆は悪霊の支配、魔女や呪術に怯えていた。悪魔の働きとは、人間を支配して、絶望、不安、貪欲、嫉妬、怒り、快楽、金銭欲、思い上がり、傲慢、

我意、偶像崇拜、肉欲、この世への愛などに人間を落とし入れることである。そして、人を滅びへと導くことである。このように、ウェスレーは天国と地獄の両方の存在を信じ、悪魔の支配下にある人は地獄に導かれると考えた。だからキリストによって新生しなければ「彼は必然的に滅びなければならない」(同、六八頁他)。キリストから新生するとは、悪魔の支配から出てキリストの支配に入ることであり、そうしない者は悪魔によって地獄に入るとするのである。地獄に入る「もつとも普通な原因は、何らかの種類の罪である」(同、七八頁)。それは「われわれの心を盲目にし暗くする」(同、八三頁)。人間は、「悪しきこの世に、邪悪な・捕え難い・意地悪の霊たちの間に住んでおり、あらゆる悪を行ないかねない心をもっているからである」(同、九九頁)。しかし、「信仰と言う基礎の上に希望は立つて」(同、一一八頁)この世の悪魔と戦うことができる。ウェスレーによれば、この世は悪魔の支配と神の支配のせめぎあう場所であり、その中でウェスレーの説教は、悪魔の支配から民衆を救う力を持っていた。それゆえ救いを求める民衆に受け入れられ、歓迎されたのではないかと思う。

カントの人間観と最高善

南 翔 一 朗

『実践理性批判』第一部第二篇「純粹実践理性の弁証論」において、カントは第一篇「純粹実践理性の分析論」までは否定

的に扱ってきた幸福を自己の哲学的思惟のうちに取り込み、「最高善」の名の下に道徳性と幸福の一致を主張するのであるが、本発表の目的はこの分析論と弁証論における共通点と差異を考察することで、カントが何を基盤として道徳性と幸福の一致を主張するのかを明らかにすることであった。

カントは、弁証論の冒頭で「理性的有限的存在者」にとつての最高善においては、徳と徳にふさわしい幸福が総合的に、すなわち因果律によって結びつかねばならないと主張する。こうして、徳と幸福の関係性は原因と結果の関係性として理解されねばならないとされるのであるが、カントによると、徳を生み出す道徳法則と幸福を生み出す自然法則はまったく異質な原理であるため、このような徳と幸福の因果的結合がおのずと生ずると安易に考えることはできない。こうして人間の実践理性はアンチノミーに陥るのであるが、カントによるとこのようなアンチノミーは批判的に解消されうる。すなわち、感性界に属しながらも道徳法則という叡智界の原理を保持する人間は、英知的なものである徳が原因となつて感性界における幸福が、間接的に(自然の知性的な創造者を介して)結果すると考えることができるのである。

以上のことからわかるように、カントは「理性的有限的存在者」としての人間の視点から徳と幸福の結合の必要性を主張し、さらにアンチノミーに陥った徳と幸福の因果的結合を、道徳的存在者としての人間をよりどころにしつつ二世界論を導入することで解消する。このように、カントは弁証論において人間の視点から可能な最高の善を問題にしており、最高善の考察